

Y35a 鹿嶋市における幼児の天文学習活動の実施

布施 哲治（情報通信研究機構）

国立天文台ハワイ観測所に在職中、日本出張の際に一般・子供向けの講演会の開催や児童書の執筆をしてきた経緯もあり、将来の天文学の発展を担う幼児・児童・生徒が宇宙にどこまで興味を持っているのか、さらに講演を聞いて天文学をどこまで理解できるかに関心を持ってきた。

和歌山大の富田晃彦氏が講演会を展開してきた大阪府藤井寺市のひかり保育園において、すばる望遠鏡に関する講演会を開く機会を2008年にいただいた。質問時間を含めて2時間弱にわたり、3歳から5歳の園児が集中して聞いていたことに驚くとともに、日ごろから「お話し会」等を頻繁に行っているという成果の現れであることを実感した。

一般的な講演会では、参加者はその日に集まり解散となるため、講演会後の変化を追跡調査するのは難しい。また参加者の組み合わせは当日が最初で最後のため、集団で学習した効果を調べることも不可能である。それに対し、地域の学校や幼稚園・保育園で連続的に学習会を開く方法では、年ごとの興味の変化や学習・経験したことによる理解度の追跡調査が容易となる。

現在、鹿島宇宙技術センターがある茨城県鹿嶋市近隣の図書館やプラネタリウムで、幼児から高齢者までを対象とした講演会を展開している。これとは独立して、幼稚園・保育園にて宇宙の学習会をはじめた。これまでに2園において3回を実施、年会までに保育園を含めさらに3回（3園）、年会直後に3回（3園）を予定している。定量的なデータを取得する段階まで達していないため、今回の発表では開催状況およびこれからの予定、今後の追跡調査の方法を報告する。